アルマンの奴隷

赤江 瀑

アルマンの奴隷

赤江 瀑

文藝春秋

著者略歴

1933年下関生まれ。日本大学演劇科中退。1970年「ニジンスキーの手」で小説現代新人賞を受賞する。1973年「罪喰い」、1975年「金環食の影飾り」で直木賞候補となる。1974年「オイディプスの刃」で第1回角川小説賞を受賞。1984年「八雲が殺した」「海峡」で第12回泉鏡花賞を受賞。

アルマンの奴隷（どれい）

1990年1月30日第1刷
1990年2月25日第2刷

（定価はカバーに表示してあります）

著　者　赤江　瀑

発行者　豊田健次

発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23
電話　03（265）1211（代）

印　刷　大日本印刷
製　本　中島製本

万一、落丁・乱丁の場合はお取替えいたします。

©Baku Akae 1990　Printed in Japan

ISBN4-16-311530-7

アルマンの奴隷 5
卒塔婆源君 55
破浪神（フィギュア・ヘッド）の夢 81
脂粉の御子の頸 115
百魔 153
影の訪れ 173
除夜の孔雀 189
禁花 211
遊べ兜や剣の光 231
忍夜恋曲者 255

装帧 堀晃

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

アルマンの奴隷

アルマンの奴隷

1

僕を、アルマンと呼んでください。

ただ、呼ぶだけでいいのです。誰かに、そう呼ばれると思うだけで、僕の体はふるえます。夜ごと、うすい光の草原を塒をめざす無数のけだものが踏み鳴らすあのアフリカの大地のように、地ひびきをたてて、揺さぶられるのがわかります。

毛深い胸をはだけた若い神のように、ライオンのように、力強いしなやかな足で僕の前に立ちはだかるアルマンの姿が、眼にうかぶのです。傷をなめ、闘いを想い、鋭く首をもたげるときの彼の、春草のようにけむる頸の草むらが。

呼ばれるだけでいいのです。

アルマンが、帰ってくるのがわかります。足音が聞こえるのです。彼が帰ってくるところを、もう一度、この眼で見たいのです。

『黒い皮膚を持っているオレの愛人が……』と、彼が彼自身にむかって囁きかけるみたいに歌うあの煙草のけむりでしわがれた低い咽の揺すれる音を、僕にたっぷりと聞かせながら帰ってくる、ものうげな姿が見たいのです。

熟れた豊かな筋肉を一切れずつ剝きとって、投げあたえてくれでもするように、ほんのすこしずつその腰をゆっくりと開いて見せながら、彼が歌うあの歌が、もう一度僕は聞きたいのです。

『黒い皮膚を持っているオレの愛人が、
ゆうべまた　あの漠い店で死んだ。
だれも捲きあげない日被い
だれもはいってこない鉄の扉
だれもすわらない空の椅子
バーボンだけが、残ってたぜ
……』

もう僕が作ったのか、彼が即興に口ずさみ聞かせてくれてできた歌か、僕にはわからないくらい昔の歌のような気がときどきしたりするのですが、僕が即興に作った詞を、彼がその場で口ずさみ、酔っぱらいながら曲にした、そんな記憶もあるのです。

ただ旋律のけだるげなものうい調子だけが忘れられない、暗い輝きをちりばめて、むせぶような曲でした。

黒い皮膚を持っているボクの愛人が、ゆうべまたあの漠い店で死んだ。

そのたびに、
ボクは自分に誓ってきたはずだったのに。もう殺人はよしにしようと。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

そしてそのたびにボクは、やっぱり、
あの漠い店に灯を入れるのだ。

そんな意味の内容を歌っている曲でした。
酔って彼が口にすると、麻薬のようにいきいきと皮膚にも肉にもしのびこみ、しずかに狂気の羽をそよがせ、小さな無数の火の玉を転がす見えない手のやさしさや、ほむらの舌の強靭さに、つい骨抜きにされ、気がつくと灰になっている肉体が、僕にはなつかしいのです。
彼は一度、たった一度でしたけど、舞台でも歌ってくれたことがあります。彼にも、ひょっとしたらあの歌は、案外気に入っていたのかもしれません。どんな芝居の舞台だったか、もう思い出せはしませんが、赤みをおびたセピヤ色の照明が靄だって、薄闇につつまれた舞台の奥から、しどけなくボタンをはずした胸もともあらわなシャツ姿でぼんやりとあらわれてきたアルマンは、いまも眼の底に残っています。そしてふと、彼は口にしたのです。あの歌の旋律を。
それは旋律だけでしたが、呟くみたいにふしぎな調べで、よく役の心にも溶けこんだ圧倒的なシーンとなり、当時劇評にもとりあげられ、評判を呼んだ記憶が、確かに僕にもあります。
アルマンについて思うとき、あの歌は、僕のなかから消し去ることはできません。不意に耳もとを流れ、身辺に湧き、皮膚の下へしのびこみ、肉の底を焼き荒します。
アルマン。
もう彼と会うことはありません。
僕を燃えつきた灰にして、悠然と首を起こし、のっそりと立ちあがって、一揺すり身を揺るがせ、そして春の陽ざしが散乱する粉微塵なガラスの破片の降るような東京の街の光のなかへ、いつも

のようにこともなげに出て行った、あのある一日を最後にして、彼はもどってこなくなりました。
彼の姿を見失ったその最後の春の日のことを、僕は詳しく説明することができません。なぜといって、いつもの彼と別に変った様子もなく、出て行ってもやがてはまた帰ってくる彼の塒が、すなわち僕の塒なのでしたから、その一日も、その前の一日と、またその前の前の日とも、似たり寄ったりな日常で、これといって記憶にとどめるできごとなどは、なかったと言うしかないのです。
つまり僕たちが持った過去の数限りない日々と、その一日は溶けあって、記憶のなかでは区別のつかない、ごくありきたりな一日だったと言うほかはないのです。
その春の一日のアルマンについて、なにかを説明しようとすれば、それ以前の僕たちの過去の無数の日々にいたアルマンのことを、語らなければならなくなるでしょう。
そして、それは、僕にとっては、たいへんむつかしいことなのです。
と言うのは、アルマンが僕の塒を出て行った最後の春の日と同様に、僕は、アルマンが僕の塒に住むようになった最初の日の模様を、思い出すことができないからです。
いえ、そればかりではありません。僕はいつ、どこで、どんなふうにしてアルマンにはじめて出会い、彼を知るようになったのか、そのいきさつさえはっきりと話せはしないのです。あれだったか、これだったかというふうな記憶は山ほどあります。でも、そのなかのどの一つが、彼との最初の出会いを語れるものであったか、それが詳らかではないのです。劇しい光輝の噴射する光源体にむかって眼を見開き、あの一条か、この一閃かと、第一光の原点を探し出すようなもので、ただ眩しさだけが氾濫し、無数の発光線の群れがそこにあるとわかるだけで、僕の視力は奪い去られているのかもしれません。光輝の闇とでも言えましょうか、そんなものが、僕とアルマ

ンの出会いを、光の源で消しています。
アルマンは、僕の光輝、発光体です。
だからアルマンについて語りはじめようとすれば、その氾濫するおびただしい光輝の一条一条を寄せ集めねばなりません。しかし、そんな作業を言葉に変えて他人に伝え尽すというような芸当は、僕にはとてもできません。
そこで僕は、ここに一つの『詩』を掲げさせていただきたいと思うのです。
あなたが昔、ある詩誌に発表なさった作品です。そして僕が、アルマンと出会った頃のある時期に、たまたま眼にした作品です。
ああ、なんということでしょうか。僕は、そのあなたが造形された文字のなかに、確実に、僕とアルマンの出会い、あるいは僕たちの暮しのはじまりとでも言ってよいと思われる僕の現実を、見つけたのです。
あなたが書かれた詩のなかに、僕のアルマンがいます。そして、僕が、います。
僕は、あのときのおどろきと、感動を、忘れることができません。
そう、僕たちもこうしてはじまったと、僕はその折、思ったのです。
それ以来です。僕が、あなたの発表される作品を心待ちにして、かならずその詩誌を紀伊國屋書店で買い求めるようになりましたのは。だからあなたの作品は、残らず読ませてもらっています。そして、読むにつれ、待つにつれ、月ごとに、年ごとに深まったあのおどろきと、奇怪感は、口にはとてもあらわせません。
あなたの新作が出るたびに、眼を皿のようにして読み耽り、考え耽った、あの何年間かの日々は、僕にはまさしく物狂おしく、恐怖にさえ充ち充ちたふしぎな日々でした。

あの日々が、もっと永く、もっと延々と続けられていたら、僕はきっと、一愛読者の立場を守れはしなかったでしょう。あなたにお会いしに出掛けたと思います。

僕にもし、文字を並べて、アルマンを書き、アルマンとの僕の暮しを表現してのける力が備わっていたら、きっとあなたをおどろかせることができたでしょう。

あなたが造形された世界。それがそっくり、僕とアルマンの世界であり得るからです。

あなたは、アルマンを、ご存じなのではないでしょうか。

アルマン。

僕がそう呼ぶ彼は、無論、外国人なんかではありません。彼が、そう呼ばれるのを好むだけです。

そして僕も、呼び馴れて、もうこの名で呼ぶ以外にどんな名も彼に冠することができない、彼が彼であるためにはたった一つしかない呼び名です。

「アルマン。そう言えば思い当る男を、あなたは、知ってらっしゃるでしょう?」

僕は何度、そう訊ねに、あなたのもとへ出掛けようかと思ったことでしょう。いえ、もうすこしあなたが永くあの詩誌に作品を発表し続けておられたら、僕は、そうしたと思います。

しなければ、とてもあの物狂おしい日々のなかで、ただあなたの次の新作を待つだけの暮しなど、僕には耐えておれはしませんでした。辛抱の限界にきていました。

そんな矢先でした。急に、あなたの作品が誌面から姿を消したのは。それ以後、どんなに待っても、あなたの名前を見ることはできませんでした。そう。ふっつりと、あなたは、僕の前から消えていなくなってしまったのです。

あなたが消えると、僕のあなたに関する妄想も（そうです。僕は妄想だと自分に言い聞かせて

きていましたから)、消えました。

僕にまた、アルマンと二人っきりの水入らずの生活が、もどってきました。彼の光輝に飾られて、泣くことも苦しむことも傷つくことも虐げられることも、燦然たる歓喜に彩られるあの生きることが陶酔である生活が。

僕は、充ち足りて生きました。

そう。アルマンが、一人その燦然たる世界を背負ってあの春の光の粉微塵な戸外へ立ち去ってしまった日まで、僕は百花にまみれて尽きることのない蜜月を生きてこれたのです。無論、あなたのことなど忘れ果て、塵ほども思い出しはせずに。

アルマンを見失ってから、あなたは、ふたたび僕の歳月のなかへ、登場するようになりました。

アルマンとすごした蜜月の、その蜜のしたたりを、僕に想い起こさせるよすがとして。

古いアルバムを捲るように、僕はあなたの作をたどり、活字の原野を逍遥し、黄ばんで色も褪せかけた紙面を埋めるアルマンの数限りない奥津城を、尋ね尋ねて彷徨いあるく毎日がはじまったのです。

それをはじめて、もう何年になるでしょう。また狂おしい歳月が、僕の上にもどってきたのです。

いまとなっては、あなたが二十数年前、書きとどめて残されたあの古い活字のなかにだけ、僕のアルマンがこの世に存在したことを伝える証しが、あるのです。

僕が知っているアルマンを、あなたも知っている。いや、あなただけが、この世で僕以外に、アルマンを知ったただ一人の人間だとさえ、僕には思われるのです。

だって、あの活字のなかには、ほんとうに僕のアルマンが、いますから。

あなたとお話したいと、どんなに思ったでしょう。思い、思い、今日まで歳をすごしてきました。
あなたにも、彼は、
「アルマン」
と、呼ばせたのでしょうか。
そんなことが、お話したかったのです。
……

2

『僕を、アルマンと呼んでください』という冒頭句ではじまる奇妙な手紙を、私が受けとったのは、ごく最近のことである。

手紙は全文一字一句たがえずに読んでいただくつもりであるから、私は多くを語らないが、ただ書簡中にもあるように、私が学生時代に書いた似非詩、詩と言えば僭越にすぎる『詩』を、幾篇かここで再公表せざるを得ないことになり、(と言うのは、書簡の主が、文中にその『詩』を自筆で再録してきているので、その部分だけ落すこともならず、また落しては、彼が言うアルマンなる人物像も、彼自身の人間像も、読者には推測できまいと思われるので、あえてお眼を煩わすことにしたのだが)これがなんとも面映く、恥多く、稚拙にすぎて、いたたまれないのである。

若い頃の悪戯書き、思索の素描のようなもので、いまあらためて眼にしてみると、そんなものを一心に書いて詩の雑誌に載せてもらっていた時期もあったなと、或る懐かしさも湧くのであるが、書いていた当時にも、これを詩などと自覚したことはなく、詩に似て詩にあらざるなにか、強いて言えば似非詩とでも言うほかはないものだと、思っていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c